

対馬の闇 V

挙式延期

春日信彦

挙式延期

3月9日（月）。ありがたい日。伊達と沢富はナオ子たちのマンションに呼ばれていた。挙式に不安がよぎったナオ子は、これからどうすべきか、二人と相談することにした。というのは、いまだ、沢富家から挙式についての許可が下りなかったからだ。対馬での勤務を終えれば、無事挙式があげられると安易に考えていたが、不運にも麻薬捜査は難航し、もう1年、伊達と沢富の対馬勤務が延長された。万が一、いつまでたっても、結婚の許可が下りなければ、仲人ができなくなり、警察署長の夢も水の泡となって消えていくように思えた。結婚の許可が下りない理由を沢富家に確認したい気持ちはあったが、これが、かえって藪蛇となりはしないかと思うと、全く身動きが取れなくなった。

キッチンテーブルに腰掛けた4人は、深刻な顔でお互いを見つめあっていた。息苦しい雰囲気をつぶしよくと、沢富が明るい声で話し始めた。「そう、深刻にならなくても、いいじゃないですか。結婚するという事は、両親に伝えていきますから。式は、教会で挙げると伝えれば、それでいいですよ。披露宴なんて、いつでもいいんですから。対馬勤務が終われば、東京と福岡で、盛大に披露宴、やりましょう。明日にでも、両親には、6月に式を挙げると伝えます」3人は、落ち込んだ表情でうなずいていた。ナオ子は、沢富の決意を知って、一瞬喜んだが、やはり、不安はぬぐい切れなかった。

悲壮な顔のナオ子は、不安を述べた。「確かに、結婚は、二人の問題だけど、仲人の立場として、なんとなくスッキリしないのよ。勝手に、式を挙げて、後でトラブルにでもなったら、それこそ、仲人の責任じゃない。ご両親に嫌われでもしたら」沢富も仲人の立場を考えると軽はずみなことはできないとうなずいた。「そうですね。両親を無視すれば、仲人さんに迷惑がかかる。やむを得ない、来年まで引き伸ばしましょう」ナオ子の大きな悲鳴が上がった。「え～～、来年？来年がダメだったら、どうする気？永遠に結婚できないじゃない」沢富は、そこまで悲観的に考えなくてもいいのではないかと思い、話を続けた。「大丈夫ですよ。きっと、対馬勤務は、今年までです。永遠に結婚できない何って、ちょっと、大げさですよ」

ナオ子の悲観的な発言にひろ子は動揺し始めた。ご両親に嫌われているのではないかと嫌な予感がした。「もしかしたら、嫌われているのかもしれませんが。サワちゃんにふさわしくないのかも？」さらに悲観的な発言を聞いた沢富は、力強く否定した。「そんなことは、ありません。母は、とても気に入っていました。おやじは、一度、ひろ子さんに会いに、福岡に来ると言っていたんです。でも、対馬勤務になってしまい、こんなことに。おやじは、仕事のことしか頭になんです。やはり、思い切って、式を挙げましょう。両親のことは、僕に任せてください。どこの教会にしましょうか？ひろ子さん」腕組みをして聞いていた伊達が話し始めた。「そう、焦るな。やはり、了解は必要だ。そうだ、二人で、ご両親に会ってこい。そして、じかに了解を得るんだ」

ナオ子もうなずき、ひろ子を励ました。「そうよ。ひろ子さんは、お父様には会っていないんだから、了解が得られないのは、当然よ。バカね～～、私たちって。早速、休暇を取って、東京に行きなさい」沢富は、即座に返事しなかった。しばらく、うつむいていた。心配になったナオ子は、声をかけた。「どうしたの？休暇が取れないの？」沢富は、しかめっ面で話し始めた。「それが、今は、それどころじゃない。東京は、パニックだ。コロナ感染拡大しているときに、式なんか、挙げれるものか、っていうんです。全く、大げさなんです。おやじは、何を考えているのやら」

ナオ子は、イベント中止のことを言っているような気がした。「そうよね、今、いろんなイベントが中止されてるじゃない。いろんなスポーツの試合も中止みたいだし、相撲も、無観客よ。要は、披露宴に国会議員を呼べないって、言ってるんじゃないかしら」沢富は、イベント中止のことをすっかり忘れていた。対馬では、感染が確認されていなかったが、日本中、いや、世界中、コロナでパニックになっていた。伊達がつぶやくように言った。「武漢は、都市封鎖だ。確かに、感染不安で世界中、パニックだ。こんな時に、披露宴はやれんだろう」ナオ子もうなずいた。「披露宴はムリね。一番の問題は、ひろ子さんが、お父様に会ってないことよ。会わずに、承諾はムリよ。コロナが、収束するまで、会えないってことはないでしょ。とにかく、お父様に会って、結婚の承諾を得ることね。そうすれば、式を今年中に挙げて、披露宴は、来年でもいいじゃない」

苦虫を嚙み潰したよう表情になった沢富が、返事した。「それが、今は、無理みたいなんです。ひろ子さんを会わせたいと言ったところ、東京にやってきて、コロナに感染したら大変だということです。もうしばらくすれば、コロナも収束する。東京オリンピックが終われば、会いに行つてやる、って言うんです。まったく、自分中心なんだから。申し訳ありません」伊達は、う～～とうなずき納得したように話し始めた。「ま～～な、日本各地いたるところで、感染が確認されている。関東は特に感染者が多い。俺も、今は、東京に行かないほうがいいような気がする」意気消沈したナオ子が、口をはさんだ。「あ～～、それじゃ、東京オリンピックが終わるまで、お父様に、会えないってこと。ということは、結婚は、早くて、来年ね」

伊達が、明るい声で話し始めた。「そう、がっかりすることはない。果報は寝て待て、って言うじゃないか。それまで、どこの教会にするか、決めればいいんじゃないか？長崎には、たくさん教会があるようだが」ひろ子も笑顔で返事した。「そうですね。サワちゃん、後、一年の辛抱ね。ナオ子さん、対馬はいかがですか？何にもないところですから、退屈でしょ。二人は、対馬に取りつかれたみたいですから、私たちは、福岡に帰りましょうか？」ナオ子は、うなずき返事した。「一年ということだったから、対馬にやってきたけど、もう一年、ここにいると思うとぞっとするわね」沢富が、顔を引きつらせて話しに割り込んだ。「え～～、ひろ子さん、ビヨンド号は、だれが、面倒見るんだい。大切な犬なんだ。無責任なことはいできない」

平然とした表情でひろ子は、返事した。「それは、心配ないわ。父親が、面倒見るから。ビヨンド号を飼うようになって、元気になったみたいなの。時々、サワちゃんが、顔を出してくれたら、父は喜ぶと思うし」寂しげな表情になった沢富が、小さな声で返事した。「ま～、そういうことだったら」ナオ子が、沢富を励ますように声をかけた。「福岡に帰っても、時々、様子を見に来るから。何、しょげてるの。そんなに、ひろ子さんと一緒にいたいのか？」伊達が、マジな話になり、話しに割り込んできた。「おい、おい、マジかよ。本当に、福岡に、帰っちゃうのか。まあ、帰りたいたいと言うんなら、引き留めないけど」

ナオ子が、さみしそうな二人に返事した。「二人とも、そんなに深刻な顔をして。私たちには、ひろ子さんの結婚準備があるのよ。教会をどこにするか、東京の披露宴は、沢富家に任せるとして、福岡でも披露宴をすとなれば、ホテルを予約しなくちゃいけないし、ひろ子さんは、エステに行って、磨きをかけなきゃならないし、結婚式まで、やることがたくさんあるのよ」伊達は、うなずいたが、披露宴は、福岡でなく対馬でやるべきじゃないかと思った。「おい、披露宴は、対馬だろう。ひろ子さんの親族は、対馬にいるんだぞ。福岡ですることはないと思うがな」内心、ナオ子もそう思っていたが、再婚であることをことを考えて、福岡を提案した。「それは、そうだけど。それじゃ、対馬で披露宴をやる？ひろ子さん」

ひろ子は、高齢者の親族のことを考えれば、対馬でやりたかった。でも、再婚の披露宴であることを考えると、福岡のほうが気が楽だった。「私は、交通の便を考えれば、福岡の方がいいと思います。国会議員の方もいらっしゃると思いますし、対馬の親族は、飛行機を使えば、すぐですから」沢富は、再婚のことを察知した。「ひろ子さんに任せますよ。ナオ子さん、よろしくお願いします」ナオ子は、話を続けた。「ひろ子さんと打ち合わせながら、挙式の段取りを練るわね。経過報告は、ちゃんとするから、安心して。そう、あなたは、どんなことを話すか、考えて頂戴よ。おっちょこちよいだから、心配だわ」そういわれた伊達は、仲人の重責をずしんと感じた。「そう、いじるなよ。やるときは、やる男だ。でも、ちょっと、ビビるよな。お偉いさんばかりだからな」

沢富がさみしそうな表情でひろ子を見つめていた。ひろ子は、ナオ子に声をかけた。「ナオ子さん、いつにします？」ナオ子は、首をかしげて返事した。「そうね、今は、コロナで自粛ムードだし、来月にしましょう。そのころには、少しは、落ち着いているんじゃない」伊達と沢富は、うなずいた。ひろ子は、新しい情報はないか、伊達に尋ねた。「ところで、新しい情報、ありませんか？警察に、何か動きがあるはずなんです。直感なんですけど」伊達は、腕組みをするとウ〜〜とうなずき返事した。「ないことはない。これが、事件と関係してるかどうか、わからんが」即座に、ひろ子は話をせかした。「いったい、どんなことですか？」伊達は、話すべきかどうか悩んだが、知りえている範囲の情報を話すことにした。

話を聞けば、きっと、ひろ子は捜査に乗り出すと思い、沢富は、話を止めようと思ったが、間に合わなかった。「いやな、果たして、捜査の対象となるか、あやふやなんだが、大野巡査が言うには、近々、神戸に行くそうだ。しかも、車でだ。大野は、新幹線を使われては、と言ったそうだが、安倍警部補が観光も兼ねて車で行く、と言ったそうだ。ただ、これだけのことから、特に疑うことはないと思うが、今のところ、これぐらいだ」ひろ子は、車で麻薬を運んだという出口の手紙を思い出した。もしかしたら、その車で麻薬を運ぶつもりではないか？と一瞬、思ったが、長距離を警察官が運ぶのは危険が高すぎると判断した。ならば、ほかに運ぶものといえば、お金しかない。何かの取引に使われるお金に違いない。

ひろ子は、確認した。「大野巡査が、運転するということですね」伊達は、即座に返事した。「そうだ。安倍警部補のお供だそうだ」ひろ子は、何か、匂うものがあつた。これだけの情報で現金輸送の判断はできない。もちろん、現金以外の何かを輸送するのかもしれない。言えることは、表に出せない何かを輸送するということだ。どんな車で輸送つもりなのか？ひろ子は、目をむき出して、尋ねた。「車って、警部補の車ですか？」伊達は、答えた。「そこまでは、知らん。知りえたことは、近々、安倍警部補のお供で、大野巡査が神戸に行くということだけだ。それ以上のことは、全く、わからん」ひろ子は、大野巡査から直接情報をとることにした。

福岡に帰ることが決まり、ナオ子は二人を返すことにした。「あなた、明日もあることだから、そろそろ帰ったら」伊達は、うなずき、沢富に同意を求めた。「サワ、それじゃ、帰るとするか。来月には、二人は、帰るとき。なんだか、見捨てられたみたいだな。いいさ、もう一年、頑張れば、福岡に帰れる。まあ、生還できるかは別だが」伊達はワハハ～～と苦笑いをした。ナオ子は、冷めた顔で追い打ちをかけた。「なに、バカなことを言ってるんですか。仲人を無事終えるまでは、生きててもらわないと。ね～～、ひろ子さん」ひろ子は、うなずいたが、心の底で、不吉な予感を感じた。「サワちゃん、無理はしないでね。危ないと思ったら、伊達さんに任せればいいから」伊達が、ポンと胸を叩いて、返事した。「ひろ子さん、心配はいらん。名刑事がついている。無事、事件を解決し、凱旋して見せる」ナオ子が、皮肉を言った。「あなた、頼みますよ。くれぐれも、迷刑事にならないように。署長になるまでは、殉死なされないように」伊達は、沢富に帰るアイコンタクトを送った。

失恋自殺説

早速、ひろ子は、大野巡査から情報を得ることにした。3月10日（火）呼び出された大野巡査は、愛車の白いソリオで約束の午後6時にさゆりの民宿に到着した。ひろ子は、二階の部屋から、対馬海峡を隔てたぼんやりとかすむプサン市を眺めていた。大野巡査を案内したさゆりは、ひろ子に声をかけた。「大野さんが、お見えよ」ひろ子は、目を輝かせて振り向いた。「来てくれたのね。ありがとう」大野巡査は、頭をかきながら返事した。「対馬に大事件はありませんから、暇なんです。出口巡査長の件ですが、今のところ、これといった、情報は、ありませんが」ひろ子は、テーブルに着くように手招きした。さゆりは階下に降りていった。ひろ子は、笑顔で話し始めた。「今日は、ちょっと、聞きたいことが、あるのよ。伊達さんから聞いたんだけど、神戸に行くんだって。警部補のお供で」

大野巡査は、つい、うっかりしゃべってしまったことを思い出した。「いや、まあ、運転を命じられただけです」ひろ子は、身を乗り出して、尋ねた。「いつ行くの？」単刀直入に質問された大野巡査は、顔を引きつらせて身を引いた。「いつって、言われても。まだ、日程は、聞いていません。今月中に、行くことになってますが」ひろ子は、大きくうなずき、腕組みをした。「車は、警部補の車？」大野巡査は、怪訝な顔で、返事した。「それが、署長が用意したアルファードなんです。ちょっと、変ですよ」大野巡査は、神戸に行く目的も知らされていない。しかも、警部補の車ではない。やはり、これには、隠されている何かがあると直感した。いったい、何を、どこに、運ぶのか？

ひろ子は、大野巡査にお願いした。「そうなの。神戸まで、運転するのよね。だったら、戻ってきたら、警部補の様子を報告してくれない」大野巡査は、うなずいた。「はい。でも、神戸行きが、何か、出口巡査長の事故死に関係あるんですか？」ひろ子は、ニコッと笑顔を作って、返事した。「女の直感よ。神戸に行くんだったら、新幹線じゃない。それを、署長が用意したアルファードで行くのよ。何か、におうじゃない。そう思わない？」大野巡査もその点が引っかかっていた。「ひろ子さんも、そう思われますか。新幹線のほうが、早いと提言したんです。そして、一泊二日の出張だし、帰りは、のんびり、岡山、広島を観光をしながら、帰ろうじゃないか、って言われたんです。それは、署長の配慮らしいんです」

ひろ子は、うなずき話し始めた。「署長が用意した車で行くということは、今回の出張は、署長の指示ということね。署長は、アルファードで何を運ばせようとしているのか？そこよね」大野巡査は、首をかしげ尋ねた。「ひろ子さん、何を根拠に、何かを運ぶといえるんですか？」ひろ子は、あきれた顔で返事した。「それじゃ、二人の警官が、バカでかいアルファードに乗って、神戸まで何しに行くというの？誰かに、何かを、届けるために、神戸に行くと考えたほうが、自然じゃない」大野巡査は、改めて、神戸に行く目的を考えてみた。警部補が、誰かに会うことは確か。その目的は何か？兵庫県警の誰かに会うとして、直接会って、話さなければならないほど重要な要件とは何か？それとも、ひろ子さんが言うように、何かを届けるのか？何かを届けると考えた場合、いったい、何を届けるのか？

ひろ子は、考え込んでしまった大野巡査に声をかけた。「なに、深刻な顔で考え込んでるのよ。とにかく、アルファードで行くんだから、何かを運ぶことは確かよ。いったい、何を、誰に、届けようとしているのか？そこを探るのが、大野君の役目。頼むわよ」大野巡査は、重責を負わされ、困り果てた顔つきになった。「そう、言われても、僕は、単なる運転手ですから。警部補が、何を運ぶかを話すでしょうか？困ったな～」ひろ子は、これでも警察官だろうかと思いを言った。「もしもよ、極秘のものを運ぶのであれば、だれにも話すはずがないじゃない。だから、大野君が、コナンになって、探るんじゃない。しっかりしてちょうだい。大野君が、頼りなんだから」

大野巡査は、ひろ子が疫病神に思えてきた。確かに、出口巡査長の事故死の捜査を続けたかったが、署長、警部補たちを疑いたくはなかった。これだけ聞き込みをしても、何一つ手掛かりがない。やはり、何かに悩んだ末、出口巡査長は自殺したのではないかという思いが強くなっていった。ひろ子は、自分たち、警察官を疑っている。この点は、どうも、納得がいかなかった。「頼まれれば、やりますが、ひろ子さんは、警察を疑っているんですか？僕も警察官の端くれです。心外だな～～」ひろ子は、ちょっと気まずくなった。警察を疑うということは、大野巡査も疑うことになる。弁解するように返事した。「疑っているというんじゃなくて、興味があるのよ。大野巡査だって、興味あるでしょ。アルファードで行くのよ」

大野巡査は、警察を疑いたくはなかったが、アルファードで神戸まで行くことに、疑問を持っていた。署長の指示ならば、署長のレクサスで行けばいい。あえて、アルファードで行かせるということは、ミニバンでないと運べない何か大きなものを運ぶということか。警察が運ばなければならない大きなものとは、いったい、どんなものか？大野巡査には、全く、見当がつかなかった。大野巡査の頭は、混乱していたが、それ以上に、コロナ感染のほうが不安だった。大阪での感染者を考えると関西方面にはいきたくなかった。よりによって、こんな時に神戸に行かなければならない自分がみじめに思えた。

大野巡査は、コロナの不安を口にした。「話は、変わりますが、今、コロナ感染で大騒ぎじゃないですか？対馬に感染者が出なければいいんですが、心配ですよ」ひろ子もコロナ感染を心配していた。というのは、対馬には、多くの韓国観光客がやってきていたからだ。韓国の宗教団体の信者に多くの感染者いることが、ニュースで取り上げられていた。「そうよね。50キロ程離れた韓国では、感染者が急増してるというし。ほら、対馬には、多くの韓国人観光客がやってきてるじゃない。対馬から感染者が出るのは、時間の問題かも。早く、対馬から、逃げ出さなくっちゃ」

逃げ出すと聞いた大野巡査は、その意味を尋ねた。「逃げ出すって、どこにですか？」ひろ子は、来月、福岡に帰ることを話すことにした。「いや、逃げ出すってわけじゃないけど、福岡に帰るのよ。結婚の準備とかで、いろいろとやることがあつてね」大野巡査は、うなずき返事した。「そうでしたか。それじゃ、結婚式は、福岡で？」ひろ子は、笑顔でうなずき返事した。「そうね。今のところ、福岡でやる予定。でも、今年の結婚は、無理ね。式は、来年になると思うわ。コロナで騒いでる時に、披露宴は、できないでしょ。来年、コロナが終息することを祈っているけど」大野巡査は、納得した顔で返事した。「それじゃ、披露宴に呼んでください。ひろ子さんのウエディング姿、美しいだろうな～～」

ひろ子が、返事しよとした時、ノックの音がした。「ちょっといい。差し入れ」ひろ子が、どうぞ、と返事するとさゆりがドアから顔を出した。トレイの上には、イチゴが入った器があった。「イチゴ、食べない」さゆりは、ひろ子の右横に腰掛け、イチゴの器をテーブルに置いた。イチゴを小皿に取り分けると二人の前に差し出した。大野巡査は、大きな歓声を上げた。「めっちゃ、うまそう。イチゴ、大好きなんです。いただきま〜〜す」大野巡査は、子供のようにパクついた。さゆりが、コロナの騒ぎを口にした。「コロナって、怖い。感染したら、肺炎になるのよね」ひろ子がマジな顔つきになり、返事した。「確かに、感染すると入院しなくちゃならないけど、重症になるとは限らないのよ。高齢者とか、基礎疾患がある人は、危険だけど」

さゆりが、悲壮な顔で話し始めた。「万が一、対馬で、感染が拡大したら、どうしよう。主人、糖尿病だし。母は、高血圧だし。どうか、対馬にコロナがやってきませんように。神様、お願いします」さゆりは、手を組んで、神に祈りを捧げた。大野巡査が、おびえるさゆりにひろ子の帰福の話をした。「ひろ子さんは、早速、対馬から逃亡されるそうなんです。いいよな〜、逃げるところがある人は」さゆりは、目を丸くして尋ねた。「え、どういうこと。福岡に帰るってこと。そうか、もう一年が過ぎたのか。あつという間の一年だった。ひろ子がいなくなると、さみしくなるな〜。たまには、対馬に遊びに来てよ。いつでも、歓迎だから」

ちょっと気まずそうな顔でひろ子が返事した。「確かに、一年がすぎたんだけど、サワちゃんと伊達さんは、もう一年、ここで仕事なの。でも、ナオ子さんのことを考えて、帰福することにしたのよ。それに、いろいろと結婚式の準備もあるし。でも、まだ、やり残してることもあるから、時々、対馬には来るわ」さゆりは、コロナ感染のことを心配して、挙式のことを尋ねた。「挙式は、いつするの？今年、ヤバいんじゃない」ひろ子は、うなずき返事した。「そうなの。だから、おそらく、来年になると思う」さゆりは、大きくうなずき返事した。「それがいい。今年、ダメ。全国的に、ますます、感染拡大してるし。そう、うちも、キャンセルが続いてるのよ。韓国人観光客が、来なくなったでしょ、ホテルも、民宿も、飲み屋も、商売は、上がったりよ」

コロナ感染による経済的被害は、対馬でも起きている。おそらく、今年一年で、観光、レジャー、外食関連の多くの中小企業が倒産し、失業者が増大するように思えた。この経済的被害は、世界中で起きている。特に、中国、韓国、イタリア、スペイン、アメリカでは、甚大な被害が出ている。万が一、コロナ感染が、一年で収束しなければ、世界大恐慌になってしまう。経済混乱が続けば、結婚披露宴どころでは、なくなってしまう。ひろ子は、来年の挙式が不安になってきた。大野巡査が、顔面蒼白になっているひろ子に声をかけた。「話は変わりますが、出口巡査長は、自殺だと思います。ひろ子さんは、帰福されることだし、捜査は、もう、打ち切ってもいいんじゃないですか？やるだけのことは、やったし」

さゆりも同意して、うなずいた。「そうね。これだけ、聞き込みをして、手掛かりがないということは、やっぱ、自殺ね。ほら、悩みがあったって、瑞恵さんが言ってたじゃない。悩んだ挙句、自殺したのよ」ひろ子も、最近では、自殺に思えてきた。ヤクザに口封じされたと思っていたが、何の手掛かりもなければ、単なる妄想でしかなくなる。麻薬の運び屋をやったことで、自責の念に駆られて、自殺したのか？ひろ子は、納得がいかなかったが、もはや、事件の解決は、無理なように思えた。ひろ子は、大野巡査に尋ねるようにつぶやいた。「自殺ね～～。どんな、悩みがあったのかな～～。自殺するほどの悩みって、考えつかないんだけど」

大野巡査が、即座に返事した。「自殺するほどの悩みといえば、一つじゃないですか」ひろ子は、全く思いつかなかった。「え、男子には、自殺するほどの悩みがあるの？まったく、見当がつかないんだけど。さゆり、わかる？」さゆりも全く見当がつかなかった。「大野君、自殺するほどの悩みって、何よ。言いなさいよ」大野巡査は、大きくうなずき返事した。「それはですね～～。失恋です。それ以外、考えられません」さゆりは、眉間にしわを寄せて返事した。「え～～、失恋。出口君が、失恋で、自殺。それはないわよ。野球小僧が、失恋で自殺。それは、ない、ない」ひろ子も、大きくうなずいた。「出口君が、失恋で自殺。それは、ない。そんな、やわじゃないわよ。警察官に、命を懸けるって、言ってたほどなんだから。それはないわよ」

失恋自殺説を否定された大野巡査は、マジになって話し始めた。「女性には、男性の繊細な心がわからないんです。出口先輩は、クリスチャンで、人一倍、傷つきやすいタイプだったんです。同じ、男性として、僕には、わかるんです」バカにされたと思ったさゆりが、即座に、問い詰めた。「それじゃ、失恋の相手は、だれよ。言いなさいよ。手掛かりがつかめなかったから、失恋自殺に持って行ってるんでしょ」ひろ子もうなずいた。「失恋相手を知ってるなら、言いなさいよ。いえないでしょ」大野巡査は、一瞬ためらったが、根も葉もない話といわれては、後には引けなかった。ひろ子の顔を見つめて、話し始めた。「本当に、相手を言っていないんですね。言わなくても、わかると思うんだけど」

さゆりは、首をかしげた。「え、私たちが知ってる人。高校の時、出口は、女子には興味ないって言ってたのよ。不愛想だし、女子に声もかけなかったし。あいつ、野球バカなのよ。いったい誰よ」さゆりは、ひろ子ではないかと思ったが、結婚を控えているひろ子の前で、相手はひろ子、とは言えなかった。大野巡査は、ひろ子をじっと見つめた。そのまなざしにさゆりは、ハッとした。その瞬間、大野巡査が言葉を発した。「その相手というのは、ひろ子さんです」目が点になったひろ子は、完全に固まってしまった。さゆりも唾然としてしまった。確かに、出口はひろ子とは幼馴染だったが、片想いの相手ではないと思っていた。

気絶しそうなひろ子に代わってさゆりが、話し始めた。「それは、思い過ごしじゃない。確かに、幼馴染で、仲は良かったけど、恋愛対象じゃないと思うんだけど。ね～～、ひろ子」ひろ子は、意識を取り戻した時のような表情で返事した。「そうよ。出口は、単なるダチよ。恋愛感情は、ないわよ。大野君は、勘違いしてる。いやになっちゃう」大野巡査は、自分の直感に間違いないと確信していた。「そうでしょうか？僕は、きっと、ひろ子さんを好きだったと思う。男子って、好きな相手を口にしません。でも、僕には、わかったんです。間違いありません」ひろ子は、断定されて、むきになった。「要は、私が、悪いて言いたい。いい、私は、出口を避けたこともないし、嫌い、ってことも言ったこともない。ブサイクとは言ったことはあったけど、それは、冗談じゃない。そもそも、恋愛感情なんて、二人には、なかったんだから」

さゆりもひろ子に同意した。「大野君、先輩思いは、いいけど、人の心は、そうわかるものじゃないのよ。たとえ、出口が、ひろ子に片思いをしてたからって、自殺しないと思うよ。片思いで自殺したら、ほとんどの男女は、自殺するってことじゃない。ちょっと、考えすぎよ。ひろ子が、出口に冷たく当たっていたところ、見たことないし」大野巡査は、もっとわかりやすいように自分の考えを話すことにした。「すみません。ちょっと、説明不足でした。出口先輩は、ひろ子さんが好きだったからこそ、自殺したのは確かなんです。言い方が、変ですが、嫌われて失恋したのではなく、自ら、嫌われる材料を作って、失恋したのです」

二人は、大野巡査の興味深い話に聞き入っていた。大野巡査は、話を続けた。「問題は、嫌われる、失恋せざるを得なかった材料、事件とは、何だったかです。先輩は、正義感が強く、敬虔なクリスチャンです。その先輩に、何か重大な事件が起きた、と僕は考えるのです。その事件とは、死にたいほどの事件だったのです。今のところ、その事件が、何かは、わかりませんが」ひろ子は、大野巡査の推理に感心していた。出口は、麻薬の運び屋をやってしまった。たとえ、知らなかったとはいえ、罪になる。出口は、自首しようとしたのかもしれない。でも、自首すれば、どうなるのか？家族に迷惑がかかる。対馬のすべての人に迷惑がかかる。

仮に、警部補に自首のことを話したとすれば、警察官の威信にかかわる、とどまるように言われたに違いない。しかも、麻薬の運び屋をさせたのは、警察内部のものだ。出口は、自首できない自分を許せなかったに違いない。だから、自殺したのか？でも、黙って死んでしまえば、ヤクザの思うつぼではないか。いや、やはり、自首されては、警察の悪事がばれてしまう。このことを未然に防ぐために、ヤクザに事故死を依頼したに違いない。ひろ子は、出口の勇気を信じたかった。悲しげな表情のひろ子は、大野巡査に返事した。「なんとなく、大野君のいうことは、わかるんだけど。自殺しなければならなかったような事件を解明しなければ、出口は浮かばれないってことよね。でも、全く、手掛かりはないし。出口のヤツ、成仏しないかも」

のんきに話に加わっているさゆりに声をかけた。「さゆり、こんなところで油売っていいの？もうそろそろ戻らないと。ご主人、怒ってるんじゃない」さゆりは、間の抜けた顔で返事した。「それは、大丈夫。さっきも言ったじゃない。お客、いないんだから。ここ、数日、暇で、暇で、死にそう。今月で、倒産かも」さゆりは、あえてのんきな表情をしていたが、心は、悲鳴を上げていた。もし、倒産すれば、何か仕事しなければ、一家は路頭に迷う。実は、ここ数日、そのことが頭にあって、夜も眠れなかった。ひろ子は、さゆりの切羽詰まった実情を察して、支援することにした。「困ったときは、お互いさま。コロナに、負けて、白旗上げては、神様に叱られる。そうだ、今週の土曜、宴会をやろう。伊達夫妻、サワちゃん、それに、瑞恵さん、みんな集めて、パ〜〜といきましょう」

大野巡査に声をかけた。「大野君は、瑞恵さんに電話して。暇してたら、来るように。私のおごりだから」ひろ子は、さゆりに注文をした。「7人分の料理、お願い。そうね、一人頭、5000円ってとこで。お酒は、追加して」さゆりは、笑顔で返事した。「そう、7人分ね。ありがとう」さゆりは、救われたような心持になった。ひろ子が、神様のように思えてしまった。ひろ子は、大野巡査に声をかけた。「大野君、友達を誘って、宴会やりなさいよ。困ったときは、助け合わないと。サワちゃんにも、宴会するように、言っとくわね」対馬は、韓国人観光客で経済が回っている。数か月、約40万人の韓国人観光客が来なかったなら、韓国人相手の店は、倒産する。対馬の観光業は、破綻するように思えてならなかった。

突然、マジな顔つきになった大野巡査が、正座して話し始めた。「先ほども言ったように、出口巡査長は、何らかの事件に巻き込まれて、自殺されたと思います。もう、これ以上、捜査しても、無駄なように思うんです。だから、きっぱりと、捜査を打ち切りたいと思います。よろしいでしょうか、ひろ子さん」ひろ子は、突然の決意にめんくらってしまった。しかも、許しを請うというのは、筋違いのように思えた。「なにも、私にそんなこと言われても。大野君は、大野君の考えでいいのよ。これまで、やるだけのことはやったし、これ以上はムリだと思えば、打ち切っていいんじゃない。私も、これ以上、聞き込みをやっても、手掛かりは出てこないと思う」

大野巡査は、話を続けた。「そうっていただけると、気が楽になります。瑞恵さんに、捜査を打ち切ってほしい、といわれたんです」ひろ子は、うなずき返事した。「そう、瑞恵さんが。そうね、いつまでも、過去にこだわってはい、だれも、幸せになれないわね。わかった。私も、捜査は、やめるわ。出口も、きっとわかってくれると思う。出口は、みんなを幸せにしたいと思って、自殺したんだと思う。みんなが、幸せになることが、出口への思いやりよ。なんだか、大野君は、瑞恵さんとうまくいってるみたいね」大野巡査は、はにかみながら返事した。「なんだか、恥ずかしいな～。僕たち、気が合うというか、将来、結婚しようかな～～なんて」

ひろ子は、大野巡査の気持ちが変わった原因が分かった。瑞恵さんは、大野巡査の身を案じて、捜査を打ち切らせたに違いない。ということは、瑞恵さんは、大野巡査のことが好きになったということ。結婚を考えているに違いない。「そういうこと。瑞恵さんの気持ちが、はっきりしたってことね。よかったじゃない。きっと、出口のヤツ、天国で、二人を祝福してると思う」目を丸くした大野巡査は、ニヤニヤした表情で返事した。「まだ、はっきりしていません。ただ、自分としては、結婚したいな～～、と思っていますけど」

ひろ子は、二人の幸せのためにも、捜査をやめることにした。きっと、出口は、妹の幸せを願っている。自殺するなんて、バカなヤツと思っていたが、もし、自首していたなら、家族は、不幸のどん底に落ちていたに違いない。出口は、女子にもてない野球小僧だったが、男の中の男だと感心した。でも、出口の不幸を考えると、神はいったい何を考えているのだろう、と悲しくなった。麻薬の運び屋にされて、家族の幸せを考えれば、自首することもできず、思い悩んだ挙句、自殺。こんなことがあっていいのだろうか？なぜ、神は、このような無慈悲なことをするのか？悪いのは、マフィア。それなのに、正義感にあふれた敬虔なクリスチャンを苦しめた挙句、神のもとに連れていくなんて。そう考えていると、ひろ子の瞳から、突然、涙があふれてきた。

コロナ特効薬

3月11日（水）。ハン会長は、午前4時、釜山港から漁船ヤマネコ丸に乗り込み、午前5時半ごろに、鰐浦湾の北部に到着した。迎いのロールスロイスに乗り込んだハン会長は、さゆりの民宿の北側に一昨年建てられたヨーロッパ調の豪華な別荘に向かった。その日の夕刻、ハン会長は、1階会議室で神戸に運ぶブツの件でシュー社長と打ち合わせを行っていた。シュー社長は、今回のブツについて知らされていないことがあった。ハン会長は、怪訝な顔つきで話し始めた。「盗聴されているとは思わないが、今回のブツは、今までとは違う。現金と一緒に運ぶものがある」シュー社長は、身を乗り出した。「それは？」ハン会長は、小さな声で返事した。「それは、特効薬だ」

シュー社長は、意味が分からなかった。「いったい、何の特効薬ですか？」ハン会長は、コロナ、とシュー社長の耳元でささやいた。「え、それを日本に。それを製薬会社に売り込み、儲けるということですね。さすが、会長」ハン会長は、顔を左右に振った。「そんなことはしない」シュー社長は、首をかしげた。「それじゃ、何のために？」ハン会長は、しばらく黙っていたが、話すことにした。「これは、Xからのプレゼンだ。中国の首脳陣は、すでに受け取っている。日本の首脳陣も恩恵に授かるということだ」シュー社長は、ますます、頭が混乱してきた。特効薬を開発したのであれば、世界各国に売れば、ぼろもうけになると思えたが、一部の首脳陣たちだけにプレゼンするとは、一体全体、どういうことか、さっぱりわからなかった。

シュー社長は、眉間にしわを寄せ、話し始めた。「プレゼンするとは、人がいいですね。いったい、Xとは、何者ですか？ボロもうけできる絶好のチャンスなのに」ハン会長は、苦笑いしながら話し始めた。「君は、いつも、金儲けのことしか考えないんだな。いや、わしにもわからん。今回のコロナ攻撃は、金儲けが目的じゃない。アメリカ国家を救済するための施策らしい。世界中で約1000万人は、死ぬ。アメリカでは、数百万人の貧乏人や老人たちが死ぬ。これは、今後、アメリカの福祉費用の削減になる。そういうことだ。だから、1000万人以上死ぬまでは、特効薬は必要ない」この話では、ウイルス兵器による殺人と受け取られた。「ということは、コロナを使った殺人犯は、CIAですか？」

ハン会長は、首をかしげて返事した。「その辺のところはわからんが、CIAが絡んでいるんじゃないのか。それより、わし自信が心配じゃ。老人で、糖尿病と来てる。コロナのターゲットだ。万が一、感染したら、イチコロだ」シュー社長は、不安げな表情で返事した。「ハン会長も、この特効薬を使えば、安心では？」ハン会長は、渋い顔で返事した。「それがじゃ。特効薬といっても、必ず助かるという保証がない。特に、病気持ちは、ヤバいらしい。だから、わしは、当分の間、ひきこもりになる」シュー社長は、マジな顔つきでうなずいた。「確かに、それは、賢明なお考えです。わたくしも、高血圧ですから、感染すると、ヤバいです。しばらく、ひきこもります。それにしても、ウイルス兵器を使うとは、アメリカも切羽詰まってるんですかね」

ハン会長は、腕組みをして、ウ〜〜とうなずいた。「思うに、アメリカは、国家崩壊した。しばらくすれば、貧乏人の反乱が起きる。それを恐れて、ウイルスで、貧乏人を抹殺する気だろう。CIAも、ここまで、貧困国になるとは、予測していなかったに違いない。CIAが、国家救済において、最も効果的な施策を考えた時、貧乏人のウイルス病死が、最も即効性があり、経費の掛からない施策となったに違いない。病死であれば、政府の責任ではない」シュー社長は、小さくうなずき話し始めた。「いつの時代も、政府は、貧乏人の反乱をもっとも、恐れている。中国も、韓国も、朝鮮も、貧乏人が、急増し、不満が爆発寸前です。また、ヨーロッパでは、移民の貧乏人が、国家を脅かしています。それらの解決策として、CIAが先手を打ったということですね」

ハン会長は、背もたれにのけぞり、天を見上げた。「そういうことだろう。おそらく、貧乏人、高齢者、病人は、かなり抹殺される。1億人以上、死ぬんじゃないか？」シュー社長は、1億人と聞いて、甲高い悲鳴を上げた。「1億人ですか？1000万人じゃ。そんなに、コロナは、恐ろしいんですか？」ハン会長は、小さくうなずき返事した。「いや、単なる憶測だ。ブツの特効薬も、本当に効果があるのか、疑問だ。コロナは、果たして、終息するのやら。終息しなければ、そうなるんじゃないか？」シュー社長は、背筋がぞつとした。確かに、終息するという保証はない。コロナは、新型で、全く解明されていない。開発した研究者たちは、完治させる特効薬を開発しているのか？万が一、特効薬を開発していても、販売しなければ、世界中の人が、毎年、死んでいく。1億人の死者は、大げさな話ではなくなる。

ハン会長は、思い出したような表情で話し始めた。「言い忘れていた。今回は、現金は運ばない。例のブツだけだ。どうも、いやな予感がしてな。コロナで、警察も、ピリピリしている。シュー社長は、現金を運ばないのであれば、神戸まで行く必要はないのではないかと思えた。宅配便のほうが、怪しまれず、早いように思われた。「現金は、運ばないということは、特効薬だけです。だったら、宅配便のほうが、無難ではないですか？」ハン会長は、ちょっと間をおいて話し始めた。「確かに、宅配便で運んでも、運べる大きさなんだが、万が一のことを考えて、直に運んでもらいたい。それと、しばらくは、コロナが収束するまでブツの取引を中止する、と伝えてもらいたい。中国、韓国のマフィアにも感染者が出た。日本のヤクザも注意したほうがいい」

シュー社長は、コロナの感染拡大に疑問を持っていた。というのは、飛沫感染にしては、拡大が速いからだ。一気に、世界中に感染拡大してる。なぜ、そんなに拡大が速いのか？「会長、ちょっと、感染拡大が、速すぎませんか？中国は、ともかく、ヨーロッパ各地、アメリカ全土。一気に、感染拡大しています。なぜですかね？」ハン会長は、はつきりした情報を持っていなかったが、故意に感染させているとにらんでいた。「まったく、解せない感染拡大だ。おそらく、コロナウイルスをばらまいている奴がいるということだ。まあ、CIAの仕業であることは間違いない」シュー社長は、ゆっくりうなずいた。「そうとしか、考えられません。でも、こうまでして、老人、貧乏人を殺したいんですかね。まったく、人間のやることじゃない。マフィアのほうが、まだ人間らしい」

ワハハ～～、とハン会長が大声で笑い声をあげた。「それは、言えてるな～～。マフィアは、極悪非道だが、人間らしさがある。だが、CIAは、人間じゃない。だから、極悪非道を超越している。数千万、数億の人間を抹殺しようとしている。これは、人間が考えることじゃない」シュー社長は、もはや、アメリカは崩壊したと確信した。今後、各州は独立し、国家をつくるのではないかと思えた。金持ち連中は、金持ち国家を作り、貧乏人を奴隷のような労働者にしようとしている。すでに、金持ちは、金持ち特区を作っている。そうなると、やはり、貧乏人の反乱が考えられる。最近、金持ち連中は、武器を買い込んでいるらしい。やはり、貧乏人の反乱が起きる前に、コロナ攻撃を仕掛けたと考えるのは、納得がいく。

シュー社長は、不謹慎な質問をした。「会長、コロナのターゲットは、老人と貧乏人だけで
すか？まさか、マフィアってことは？」ハツとしたハン会長は、目をむき出した。「どうい
うことだ。マフィアだと。わしを殺そうとしてるといのか？」シュー社長は、弁解するよ
うに返事した。「いや、そういうわけでは。CIAは、マフィアを煙たがってますから。そ
ういうこともあるかもと？」ハン会長は、小さくうなずいた。「そういわれれば、可能
性もなくはない。麻薬、カジノ、それに加え、原発。CIAを利用して、かなり儲けさ
せてもらった。ちょっと、CIAに圧力をかけすぎたきらいがある。とにかく、老人
は、感染防止に努めねば。感染すれば、天国に直行だからな」カジノと聞いて、
シュー社長は、尋ねた。「北海道のIRは、延期になりそうですか？」

ハン会長は、IRのことを懸念していた。「それじゃ。現状では、推進できん。と
にかく、コロナの終息が先決だ。そうか、CIAのヤツ、わしらのIR計画をぶっ潰す
気だな。コロナ程度の攻撃で、へこむハン・マフィアではないわ。わしは、不
死身だ。今に見てろ」CIAは、ハン・マフィアの勢力を恐れているのではない
か、とシュー社長は直感した。今や、原発開発を利用して、ヨーロッパ、日本、
中近東、への勢力拡大が顕著になった。やはり、今回のコロナ攻撃は、ユー
ロ、元、の攻撃だけではなく、マフィアへの威嚇でもある。ハン会長が、感
染しなければよいが、万が一、感染して、あの世に行くようなことになら
ば、要を失ったマフィアは、一気に劣勢になる。「会長。その心意気です。し
ばらく、この別荘にひきこもって、筋トレなりやって、健康を維持されては、
いかがですか？」

ハン会長は、笑顔でうなずいた。今や、中国、韓国、ヨーロッパ、アメリカ、
などは、コロナが蔓延している。まだ、日本のほうが安全。「それは、名案
じゃ。対馬では、感染者は、出ておらん。よし、コロナが、終息するまで、
この別荘に引きこもるとするか」笑顔を作ったシュー社長は、返事した。「
そうなさいませ。この別荘は、安全どころか、来客といえば、警官ぐら
いです」ハン会長は、警官と聞いて、別荘への来客に不安を感じた。「いい
か、これからは、来客は、一切、遮断しろ。警官であっても、別荘に入れ
るな。そして、別荘にいるものすべて、身体検査をやれ。熱があるもの、
咳をするものは、別荘から、追い出せ。いいな」ちょっと、神経質のよう
だったが、老人の致死率を考えれば、ハン会長の気持ちにも納得がいった。

シュー社長は、眉間にしわを寄せ、返事した。「はい、かしこまりました。神戸へのブツは、別荘で渡すのではなく、私が、運び屋に外部で渡せばいいのですね」ハン会長は、うなずいた。「そうじゃ。これからは、この別荘には、だれも入れるな」シュー社長は、顔を引きつらせて、返事した。「はい。かしこまりました。この別荘を完全防御すればよろしいのですね。それでは、4月の首脳会談は、中止ということですね」ハン会長は、うなずき、シュー社長を見つめた。「当たり前じゃ。こんな時に、やれるわけがない。奴らが、感染している可能性は、大いにある。会談も、余興も、中止だ」シュー社長は、直立不動で、返事した。「早速、中止の連絡を入れておきます」

ハン会長は、まじまじとシュー社長の顔を見つめた。「おい、お前は、大丈夫だろうな。いや、俺も、心配じゃ。早速、俺の体温を測れ」ハン会長の極度のおびえように笑いが込み上げてきたが、早速、体温を測ることにした。テーブルの呼び鈴を押すと即座に執事がやってきた。用件を聞き取った執事は、部屋を出ると体温計を携えてすぐに戻ってきた。体温計を受け取ったシュー社長は、ハン会長の額に当てた。「36.4℃問題ありません」シュー社長は、笑顔で報告した。ハン会長が、声をかけた。「おい、お前は、どうだ」シュー社長は、自分の額にあてた。「36.5℃私も問題ありません」二人は、体温を確認し、ホッとした。

盗聴案

対馬勤務が1年延長となり、伊達と沢富は、意気消沈していた。沢富が、悲しげな声で話し始めた。「コロナが、1年で終息しなければ、もう一年、対馬ですかね？一体全体、どうなるんでしょうか？いつになったら、結婚できるんでしょうか？」伊達も、全く、先が読めなかった。欧米の感染が急激に拡大している。日本も、急激な感染拡大がいつ起きてもおかしくない。マフィアは、コロナ感染を考えて、取引を自重するだろうか？万が一、対馬にも感染者が出れば、マトリは、思うような捜査はできない。「そうだな～～。ヤクザ連中は、コロナ感染拡大の中でも、麻薬密輸をやるだろうか？万が一、運び屋がコロナに感染すれば、奴ら、どこで治療する気か？いや、奴らも馬鹿じゃない。おそらく、取引を中止するに違いない」

沢富も取引中止説に同感だった。「僕もそう思います。ヤクザも馬鹿じゃない。きっと、コロナが終息するまで、動かないと思います。ということは、コロナが終息するまで、我々は、対馬で待機するということでしょうか？結婚もお預けですね。コロナの特効薬は、いつになったら、開発されるんですかね。開発されなければ、どうなるんでしょうか？」伊達は、コロナ感染拡大は人為的なものではないかと思い始めていた。中国のコロナ感染から、ヨーロッパ、アメリカと一気に感染が拡大している。あまりにも、感染拡大が速すぎるように感じていた。「おい、今回のコロナは、武漢からのようだが、俺は、そうじゃないように思う。きっと、誰かが、世界中にコロナをばらまいているように思うんだ。誰かは、わからないが」

沢富は、コロナは、動物から人間に感染したウイルスと思っていた。仮に、秘密結社によって、人工的に作られたウイルスだったら、そう簡単に特効薬はできないように思えた。「テロですか？サリンテロのようなものですか？世界中にテロを仕掛けて、だれが得をするんですかね。こんなことは、狂人のやることですよ。人間がやることじゃない。おそらく、特効薬が、開発販売されなければ、数千万、いや、数億の人々が、亡くなるんじゃないですか。その中でも、特に、高齢者と病人が。必ず、経済も世界大恐慌に陥る。今、治療に当たっている多くの医者もなくなり、政府は、多額の休業補償を強いられている。全く、コロナでだれが得をするというんでしょうか？」

伊達は、開き直ったように笑顔で返事した。「コロナは、人間じゃない。コロナが殺人犯だとしても、逮捕しようにも、逮捕令状はとれん。コロナに対しては、俺たちは、無力だ。コロナを逮捕できるのは、神以外いないんじゃないか？こうなったら、ひきこもって、毎日、春日神に祈願するか？」沢富が、諦めたような表情で返事した。「そうですね。我々、警察官の出番は、ありません。引きこもりましょう。そして、新しい価値観を見つけましょう。僕の価値観なんて、しょせん、ゲスの欲から生まれたものにすぎません。ところで、ひきこもり生活って、何をやればいいんですかね？」伊達は、肩を落として返事した。「そうだな～～。いざ、ひきこもってしまうと、退屈だよな～～。俺たちに、ひきこもり生活ができるのか？」

沢富は、天を仰ぎ、ため息をついた。「あ～～、退屈だ～～。何をやればいいんだ～～。ア、そうだ、将棋でもやりますか？愚痴をこぼすよりは、ましでしょ」伊達は、しかめっ面で返事した。「将棋ね～～。でもな～～、将棋をやっても、お前には、勝てっこないしな～～。何か、ほかに面白いことはないか？」沢富は、腕組みをして首をかしげた。「面白いことですね～～。中洲の屋台が、対馬にやって来ませんかね～～。禿げ頭の亭主、今もやっていますかね。全く、対馬は、遊ぶところがないところです。唯一の娯楽といえば、魚釣りですから。あ～～、パ～～といきたいですね～～」伊達も、あと一年、対馬でひきこもり生活をするとすると、気が変になってきた。「やっぱ、いったん、歓楽街で遊びを覚えた俺たちには、離島のひきこもり生活は、地獄だな」

沢富は、伊達の腹を見つめた。「先輩、お腹、出てますよ。もうちょっと、ダイエットされてはどうです。そうだ、筋トレをやりましょう。我々は、警察官です。強く、たくましい体作りが第一です。先輩は、学生時代、ラグビーをやられていたんですよね。学生時代を思い出して、体を鍛えて下さい。僕は、スポーツ音痴ですが、一緒に、筋トレをやって、マッチョを目指します。それがいい。筋トレって、何をやればいいですか？先輩？」伊達は、学生時代に筋トレは、毎日やっていたが、対馬には、スポーツジムはないように思えた。「ここは、対馬だぞ。筋トレをやるようなジムはないんじゃないか？」沢富のやる気は、本物だった。「とにかく、ジムに行かなくても、やれることをやりましょう。先輩は、やっていたんでしょ。教えてください」

伊達は、筋トレをやる気になったが、もっと、やりたいことがあった。それは、ひろ子から聞いていた怪しげな別荘の盗聴だった。伊達がマスターをやっているクラブ・アリランは、3月に入り、韓国人観光客が全く来なくなった。そのために、当分の間、クラブを閉めることにした。福岡県警本部長からは、コロナが収束するまで自宅待機を命ぜられていたが、伊達は、クラブを閉めてからは、やることがなく、変装をして、聞き込みをやっていた。一度、カメラを片手にルポライターを装って、別荘に侵入しようとしたが、失敗していた。何か、うまく潜り込めるいい方法はないかと考えてみたが、名案が浮かばなかった。本部長の命令に背いた単独行動だったため、沢富には相談しなかったが、秀才の沢富の意見を聞いてみることにした。

ちょっと罪悪感を感じていた伊達は、ビールを飲みながら話すことにした。フレッジから缶ビール二つ取り出し、一つを沢富に差し出した。「筋トレもいいじゃないか。部屋にこもってばかりじゃ、体がなまって、肥満になってしまう。しかも、毎日ビールじゃ、最悪だな。そういいながら、飲んでんだから、あきれよな。本部長には、自宅待機を命ぜられているんだが、どうも、肉体派の俺には、性に合わん。じっとひきこもっていたら、病気になる。ちょっと相談なんだが、聞いてくれるか？」改まった質問に気を引き締めた。「改まって、何ですか？ビールの飲みすぎで、糖尿病になったとか？いったん、糖尿病になると、なかなか治りませんからね～。やはり、筋トレですよ」

いつもの早合点にあきれた伊達が、眉間にしわを寄せ話し始めた。「そう、俺を病人扱いするな。まだ、糖尿病には、なっとらん。話というのは、ほら、ひろ子さんが話していた、奇妙な別荘のことだ。俺は、かなりクサイとにらんでいる。あの別荘は、IT企業の社長の別荘らしいが、それは、カモフラージュだ。間違いなく、ヤクザのアジトだ。そこでだ。あそこに、盗聴器を取り付けたいと考えている。サワは、どう思う？」沢富も奇妙な別荘だと思っていた。対馬の山奥に別荘を建てる社長は、かなりの変人に違いない。ほかに考えられることといえば、ヤクザのアジトぐらいのものだ。「確かに、対馬の山奥に別荘を建てるなんて、普通じゃない。もしかしたら、ヤクザのアジトかも。そこに、盗聴器をですか？ちょっと、ヤバくないですか？」

腕組みをした伊達は、う～～～とうなり声を上げた。「確かに、ヤバイよな。でもな～、なんとか、ならんものか？サワの頭脳だったら、名案が浮かぶんじゃないか？何とかして、潜入できるものか？」本当に、別荘がヤクザのアジトだとすれば、盗聴器から、彼らの極秘情報を入手できるかもしれない。でも、あのアジトは、中国マフィアか、韓国マフィアの可能性がある。もし、そうであれば、盗聴器の設置に失敗したら、生きては帰れない。そこまで、危険を冒す必要があるのか？我々は、マトリのサポーターであって、ヤクザと渡り合う使命はない。密輸の現場を取り押さえることができなくとも、対馬での任務を果たしたことになる。

沢富は、言いにくそうに返事した。「我々は、マトリに協力するのが、任務であって、ヤクザのアジトに乗り込む任務はないと思います。確かに、盗聴器の設置に成功すれば、奴らの極秘情報を入手できるでしょう。でも、失敗すれば、どうなると思います？奴らは、日本人とは限りません。中国マフィアか、韓国マフィアの可能性もあります。そう考えると、危険すぎます。我々は、あと1年、マトリに協力すればいいんじゃないですか？」伊達は、そのことは考えていた。盗聴器の設置に失敗したら、たとえ、即座に殺されなくとも、中国か、韓国のアジトに連れていかれ、一生、奴隷として、働かさせられる羽目になる。確かに、危険すぎる。ましてや、沢富は、結婚を間近に控えている。でも、なぜか、引き下がれなかった。

伊達は、沢富の将来のことを考えて、表向きは引き下がることにした。「そうだよな。俺たちは、そこまでやる必要はない。マトリの手伝いをやればいい。あまりにも暇だから、よからぬことを考えてしまった。この話は、忘れてくれ」いつもと違って、あまりにも、素直に、あっさり引き下がった伊達が気になった。まさか、だれにも迷惑をかけないように、単独で潜入しようとしているのではないか？万が一、潜入に失敗すれば、出口巡査長の二の舞になる。それだけは、避けたかった。「先輩、抜け駆けは、ダメですよ。先輩の知恵で成功するような仕事ではありません。やる気でしょ？そう、顔にかいてありますよ」

伊達は、本心を見抜かれ、顔を引きつらせた。

即座に冷静さを取り戻した伊達は、心を落ち着けて、返事した。「俺を疑うのか？心外だな～～。今言ったことは、たわごとだ。気にするな。おとなしく、ひきこもっているさ。後1年の辛抱だ。仲人の練習でもやるさ。お前も、疑い深いやつだな～～」沢富は、伊達のお芝居には騙されなかった。おとなしく、ひきこまれるような性格ではない。どうにかして、引き留めなければならない。脅しをかけることにした。「今の言葉に、嘘はないですね。単独行動をとれば、だれも助けに来ないんですよ。出口巡査長のように、海に浮かぶことになるんですよ。いや、マフィアのことだ、生きたまま、お金になる内臓だけを切り取るかも。麻酔なんか、かけやしない。発狂するほどの地獄の痛みを感じながら、殺される。わかってますよね」

伊達は、ちょっとビビってしまった。単独行動であれば、だれも助けに来ない。捕まってしまうえば、殺されるか、内臓を売るために、解体されるかも。背筋に冷たいものが走った。正義感を抑えておとなしくひきこもるか？それとも、神様に運命を託すか？少し、頭を冷やすことにした。「わかってるさ。ちょっと、推理小説の名探偵を考えてみただけさ。ルポライターに変装した名探偵が、言葉巧みにヤクザのアジトに乗り込み、会議室のテーブルの裏側に盗聴器を取り付ける、ってのはどうかな～～。サワだったら、どんな天才名探偵を登場させるんだ？」伊達は、推理小説好きの沢富の興味を引き出そうとした。

言葉に乗せられた沢富は、シャーロックホームズになった気分になり、自分の考えを話し始めた。「そうですね～。清掃員とか、家政婦とか？ぽつんと一軒家を取材するTV局のスタッフとか？いや、やはり、別荘を取材するルポライターがいいかも？オーナーに豪華別荘の自慢話をさせる、意外と、食いつくかも？先輩、それって、名案じゃないですか」伊達は、ドヤ顔で返事した。「まあ、たまには、知恵が働くさ。要は、実際にできるかだ。サワ、やってみろよ」沢富は、目を丸くして返事した。「なに、バカなことを言ってるんですか。あくまでも、小説の話です。実際にやりませんよ。先輩も、バカな真似はしないでくださいよ。良識のある警察官ですから」伊達は、食えないやろうだと思ったが、素直に返事した。「わかってるさ。全く、冗談が通じないやつだな～～」

沢富は、今日の伊達は、信用できなかつた。なんとなく、こっそりと単独行動をするように思えた。伊達の浮ついた目は嘘をついている目と判断した。「全く、先輩がこんなに頑固だとは思いませんでした。本当に、ヤバイですよ。跡形もなく消されますよ。そんなに、あの別荘がにおうんだったら、マトリにやらせればいいんです。麻薬捜査は、マトリの仕事なんだから。そうだと、草風さんに情報提供されてはどうですか？マトリが、怪しいと判断すれば、捜査に乗り出すと思うんですが」伊達は、心でつぶやいた。一度、ルポライターに変装して失敗したのは、自分が役不足だったからだ。知識が豊富で口達者の草風だったら、ルポライター役をうまくやるに違いない。伊達は、ポンと膝をたたいた。

伊達は、感心した表情で沢富に返事した。「そうだよな。マトリにやらせればいい。俺たちみたいな大根役者じゃ、すぐに見破られてしまう。草風だったら、きつとうまくやる。早速、話してみようじゃないか」あまり気乗りしなかつたが、伊達の単独行動を許すよりは、マトリに依頼したほうが賢明と判断した。「マトリの判断に任せましょう。僕が、草風さんに連絡を取ってみます。先輩は、おとなしく、自宅待機しててください。いいですね」伊達は、不満顔だったが、大きくうなずいた。「なんだか、ワクワクしてきたな～～。草風だったら、うまくやれる。盗聴器さえ設置できれば、捜査は、一気に進展する。サワ、今すぐ、電話してくれ」沢富は、あきれた顔つきでうなずいた。

比田勝のマンションにいた草風は、沢富の電話を受け、すぐにやってきた。重要な情報提供だと判断した草風は、テーブルに着くや否や、沢富に問いかけた。「いったい、どんな情報ですか？警察内部に、怪しいものがいたんですか？」沢富は、苦笑いしながら返事した。「いや～～、そこまでは～～。これからですよ。ちょっとした情報を入手しました。捜査に役立つかどうか、わかりませんが」今のところ何一つ手掛かりをつかめていなかった草風は、一つでもいいから、一刻も早く、何か手掛かりが欲しかった。身を乗り出して、話をせかした。「どんなに些細な情報でも構いません。是非、お聞かせください」

何の根拠もない別荘の話聞かせて、がっかりさせるのではないかと思ったが、沢富は、真剣なまなざしで話し始めた。「情報というほどでもないかもしれませんが、鰐浦湾北部に、離島にふさわしくないすごく豪華な別荘があります。この別荘は、IT社長の別荘らしいのですが、どうも、腑に落ちないんです。常識的に考えて、対馬の山奥に豪華な別荘を建ててんでしょうか？あくまでも、憶測にすぎませんが、もしかしたら、ヤクザのアジトではないかと？そう思ったもので、草風さんのご意見をうかがいたくて」ヤクザのアジトと聞いて、草風は、腕組みをして、小さくうなずいた。「対馬の山奥に豪華な別荘ですか。確かに、においますね。ヤクザと決めつけるのは、どうかと思いますが、何かありますね」草風は黙っていたが、実は、この別荘のことを知っていた。また、世界的に有名なIT企業のシュー社長を調査していた。

沢富は、頭をかきながら、提案した。「伊達さんと二人で話していたんですが、あの別荘に盗聴器をつけてみてはどうかと。ちょっと、ヤバい話ではあるんですが。どうでしょう？」盗聴器と聞いた草風は、顔を引き締めた。しばらく黙っていたが、目を見開いて話し始めた。「仮に、ヤクザのアジトであれば、情報が取れるということですね。でも、盗聴器をつけるとなれば、どこに、どうやって、設置するかです。至難の業ですよ。現実的に無理では？」沢富は、二人で考えたルポライターのことを話すことにした。「ちょっとした思い付きですが、豪華別荘の特集記事として、ルポライターがオーナーを取材する、というのはどうですか？別荘内を案内してもらい、隙を見て、盗聴器を設置する、うまくいきませんかね？」

草風は、あまりにも子供じみた話にあきれた表情で返事した。「ちょっと、アニメのコナンじゃないんです。隙を見て、設置などできません。簡単に設置できるのであれば、相手も、簡単に見つけ出せるのです。簡単に見つけられない場所に設置するには、何らかの作業が必要となります。別荘でどんな作業をするかですか？」沢富と伊達は、自分たちの浅はかな考えに恥ずかしくなり、うつむいてしまった。「そうですよね。ちょっと、バカな話をして、申し訳ありません」マトリたちは、別荘が麻薬取引の拠点になっているのではないかという疑いをすでに抱いていた。草風は盗聴器を設置する方法はないかと考え始めた。「いや、バカな話では、ありません。貴重な情報です。別荘が、何らかの形で麻薬密輸に絡んでいるとも考えられます。私に、時間をください。この情報を活かしたいと思います」